Captain Maxwell との戦ひ

International Society for Neurochemistry（ISN）が Journal of Neurochemistry（JNC）の持主になった頃の昔話

鈴木　邦彦

（米国ノースカロライナ大学神経内科・精神科　名誉教授、
米国ノースカロライナ大学神経科学センター　名誉センター長）

日本神経化学会（JSN）の会員で神経化学を代表する学術雑誌の一つとしてのJournal of Neurochemistry（JNC）をご存じない方は稀だと思ひます。過去・現在、多くのJSN会員がEditorial Boardのメンバーとしてご活躍であり、さらに多くの方々がJNCに論文を発表なさってゐます。また、JNCの所有権はInternational Society for Neurochemistry（ISN）にあり、ISNの主要財源になってゐることも多くの方がご存じだと思ひます。然し、35年程前にISNとJNCが現在の関係に到達する迄にはISNの存亡に関るやうな紆余曲折があったことをご存じの方は少いやうです。昨秋東京で行はれたISN Special Conferenceの折に私はその当時の昔話を致しました。昔話ですから当然ですが、現在活発に活動していらっしゃるJSNの方々の大部分はご存じなかった内容で、もっと広くJSNの方々に知って戴く意味があるから「神経化学」に書いて欲しいとのご依頼を戴き、あの時の懇親会での雑談に多少の補填を加へて繰返すことに致しました。

私は1959年に東大医学部を卒業して、一年間のインターンの後、1960年6月、安保デモで樺美智子さんが亡くなった日に横浜を出港して渡米しました。その頃の思ひ出話は既に書きました[1]。最初の4年間程は、神経内科のレジデントとして患者の世話に明け暮れ、研究どころではありませんでしたが、1960年代半ば迄には、ベッドサイドを離れ、駆け出しのポストドクとして神経化学の世界に身を置いてゐました。ISNとASN（American Society for Neurochemistry）が発足したのは丁度その頃でした。世界の“society for neurochemistry”の中で最年長はご承知の通りJSN（Japanese Society for Neurochemistry）で、ASN、ISNはJSNに10年近く遅れて発足したことになります。ASN、ISNの発足時代に就いては、又の機会に書くこともあるかと思ひますが、現在の話からは逸脱しますのでここでは詳細は省きます。重要な点は、Journal of Neurochemistry（JNC）はISN、ASN発足に先立つ事10年、1950年代半ばにUKに根拠を置くPergamon Pressに依って創刊されたPergamon Press所有の雑誌だったことです。私が研究者として物心が付く頃の東半球のChief EditorはDerek Richterでした。西半球はコロンビア大学のHeinrich Waelschで、彼が亡くなってからWarren Sperryに引き継がれました。公式にはJNCはPergamon Pressの雑誌であって、ISNは別個、独立した学会といふ関係（無関係）は1970年代の終りまで続きましたが、その間にISNとPergamon Pressとの間にはJNCのChief Editorの任命、Editorial Boardの構成、運営等のサイエンスの面はISNが責任を持ち、出版業務はPergamon Pressが担当すると言ふ非公式の関係が出来てゐました。

1971年、Budapestでの第3回のISN総会でJNCのEditorial Boardに入れて貰ったのが、私とJNCとの25年に亘るご縁の始りでした。それ以来1995年に私がISN Presidentの任期を終るまで、私の名前は、何らかの機能で常にJNCのMastheadに

載り続けることになりました。1971年の西半球のChief EditorはDon Towerでしたが、間もなくLou Sokoloffに引き継がれました。1975年のISN Barcelonaの会の時にDeputy Chief Editorの一人だったEric ShooterがStanford大学のDepartment of NeuroscienceのChairmanになるのでJNCの仕事を辞めたいとのことで、私はDeputy Chief Editorになり、更に、二年後、Lou SokoloffがChief Editorを辞めることになって、1977年、ISN Copenhagenの時に、私に西半球のChief Editorが回って来ました。雑誌の内情などもよくは知らずに引き受けたのですが、全く偶然のタイミングで私は予想も期待もしなかったISN、Pergamon Press、JNC、三つ巴の激動の真っ只中に身を置くことになりました。

これから先の話を理解して戴く為にはPergamon Pressとその経営者であったRobert Maxwellに就いて述べねばなりません。Maxwellはチェコスロバキア出身の実業家・政治家で、学術出版社、Pergamon Pressの創業者でした。何事に付けても大袈裟で華美なことが好き、“flamboyant”を絵に描いたやうな人で、この世は総て金と政治といふタイプ。国会議員から王室のメンバーに至るまで、時の権力者に取り入り、Pergamon Pressの本社の自分のOfficeも宮殿かと見紛ふばかりの豪華さ、巨大なヨットを所有して地中海を航海したりといふ人でした（日本語のヨットではなく、英語のyacht＝“大型で豪華な遊行船”（Wikipedia））。商売の勘は鋭くJournal of Neurochemistryを創刊したことからも判るやうに、先の見えた経営者でした。その反面、世の中の規則、法律などはあって無きが如く、自分のやりたい放題で有名でした。そんなわけで、彼はCaptain Maxwellの綽名で呼ばれてゐました。然し、彼のやり方は当然のこととして多くの反感を招き、1960年代末には色々な違法経営の疑ひで英国の議会の追及を受けることになりました。その追及を逃れるための一つの手段として彼が取ったのが、自分で創刊して出版してゐたJNCの所有権をPergamon PressからISNへ無償で提供することだったのです。私は、その時のMaxwellの法律上のトラブルの詳細は知らないのですが、出版社が自分が創刊して利益を上げてゐる雑誌の所有権を無料で学会に提供するなどと言ふことは、商売としてはあり得ないことです。既にEditorial Boardの構成などを任されてJNCのサイエンスの側の運営を担ってゐたISNとしては文字通り棚から牡丹餅でした。然し、ISNは雑誌の所有者にはなっても出版業務はPergamon Pressに委託すると言ふ形で、事実上はそれまでと同じ運営が続きました。Maxwellとしては、紙の上でJNCの所有権をISNに渡しても、実際の運営は今迄通り、それで議会の追及を逃れる一助となったのですから旨くやった訳でした。Robert Maxwellに就いては、彼と永く一緒に働いたRoy Greensladeといふ人のかなり厳しい回顧録があります[2)]。

私がJournal of NeurochemistryのEditorial Boardに加ったのが丁度この頃だったわけですが、単なるEditor、Deputy Chief Editorであった時には平穏無事の印象を受けてゐました。ところが、西半球のChief Editorになって見ると、JNCが抱へる問題が見えて来ました。私がChief Editorになった最初の年末にPergamon Pressから「これが今年のISNの取り分だ」と言って送って来た小切手は米ドルにして3,000ドル程度でした。JNCの所有者でありながら、サイエンスの側の運営だけを任されてゐたISNには雑誌の財政面に就いての情報はゼロでしたので、ISNは然るべき会計士をPergamon Pressに送るから帳簿を検閲させてくれと要求しました。帰って来た返事は「Pergamon Pressのシステムで、総ての雑誌の帳簿は一つに統一されてゐる、帳簿は喜んで御覧に入れるが、Pergamon Pressが発行してゐる総ての雑誌の収支を見て貰ふことになる」。Pergamon Press程の出版社が雑誌の財政管理はドンブリ勘定なのかと半信半疑ではありましたが、若し、本当だったら多分100以上に及ぶであらうPergamon Pressの雑誌総てを統括する出納帳を見て、JNCの部分だけを抜き出して分析するなんてことは会計士への報酬だけでもISNの財政が許しませんから、こちらの要求は断られたも同然、送って来たチェックを黙って受け取るよりありま

せんでした。当時のISNは会員からの会費以外には収入は無いに等しい貧乏学会で、正確には記憶してゐませんが、多く見積っても会員数1,000人、会費が年に30ドルだったとすると会員全員がちゃんと会費を払ったとしても30,000ドル、それにJNCの収入を加へても33,000ドルの年予算でした。その予算で、隔年のISNの総会、その他の学会活動をすることは最初から赤字と向き合ってゐるやうなものだったのです。年に3,000ドルでも、JNCからの収入はISNの財政の重要な一部でした。

然し、実際にChief Editorをやって見ると、お金よりもっと重要な問題があることが判りました。東西のChief Editorは原稿が採択になると、印刷の為にPergamon Pressに送るのですが、送ってから実際に出版されるまでの期間が長い、あの当時は原稿が採択になってから実際に出版されるのが半年であれば、まあまあ宜しいと言ふ時代でした。然し、JNCの場合は、それ以上掛る。更に、雑誌の発行日と実際の出版日がずれてゐる。つまり、例へば、4月になって、その年の1月号が出て来る。これをやると雑誌の信用を落しますが、出版時間が長いことを誤魔化すことが出来るのです。例へば、9月に採択された原稿が実際に出版されるのが4月であれば、出版時間は7か月ですが、4月に出て来る号が1月号であれば、記録の上からは9月に“accepted”になった原稿が、翌年の1月号に出版されたことになり、悪くは無い成績に見えることになります。東西のChief Editorが幾らせっついても暖簾に腕押し、Pergamon PressはISNが提供するEditorを使って、今迄通り、自分に都合の良い運営しかする気が無いことは明らかでした。

業を煮やしたISNが気が付いたのはPergamon PressからISNにJNCの所有権を移した時にMaxwellは一つの致命的な失敗をしたことでした。取り交した契約文書に以下の項目があったのです。「Pergamon Pressは此処に、Journal of Neurochemistryの所有権を無償でISNに移譲する。Pergamon Pressは今後10年間はJournal of Neurochemistryを出版し続ける権利を留保する。10年を過ぎたら、ISNは自分の意志で自由に出版社を選ぶことが出来る」。10年の期限が近付いた1978年の秋になって、ISNはこの権利を行使することを決めました。Journal of Neurochemistryの出版社を公募するとの通知をPergamon Pressも含めて、あちこちの出版社に送ったら、6社ほどが強い興味を示したので、当時の東西のChief Editor(Les Iversenと私)、ISN Publications CommitteeのChairmanだったLou Sokoloff、ISNのSecretaryだったBrian Ansell、それにBernie Agranoffなどが New YorkのWard's Islandにあったの Abel LajthaのOfficeに集って、一日掛けて、候補出版社の代表の提案を聞きました。そこで浮かび上ったのがRaven Pressでした。Raven Pressの社長はAlan Edelsonといって、前身はコロンビア大学所属の電気生理学の研究者だったのですが途中で学術出版に転じた人物。従って、分野は違っても神経化学に就いても基本的な理解はある、拠点はNew York、提供された条件も悪くない、といふことで、まづ、Raven Pressと交渉しようと言ふことになりました。交渉は1979年前半に行はれましたが、Pergamon Pressで懲りた点、例へば、毎月の号は遅滞なくその月に発刊すること、独立したJournal of Neurochemistryの帳簿を維持してそれだけを見ればJNCの財政状態は直ちに判るやうにすること、ISNは何時でも帳簿を検閲することが出来ること、Journalから入る利益はISNとRaven Pressで折半すること、などを明記することに同意して、翌年1980年1月号からJournal of NeurochemistryはRaven Pressが出版すると言ふ契約を結びました。

ISNが別の出版社の可能性を探ってゐることは、Pergamon Pressに通知してあったのみならず、候補出版社の提案セッションにはPergamon Pressも参加してゐたのですから、Captain Maxwellはそれを百も承知だった筈ですが、MaxwellがISNからの三行半を受け取った時、予想通り颱風と地震と津波と噴火が同時に起りました。まづ曰く「10年前、ISNにJNCの所有権を渡した時に、当時のISNの役員たちと、『移譲契約書に何と書いてあっても、Pergamon Pressは

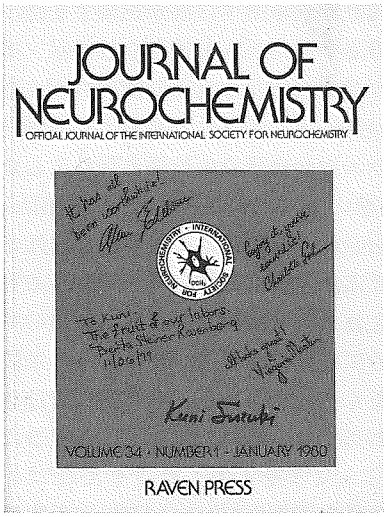

図1　Raven Pressからの最初の号の表紙。Raven Press側でサインしたのは、Alan Edelson、Virginia Martin、Charlotte Fahn、Berta Steiner Rosenberg

永久にJNCを出版し続ける』と言ふ口約束をした。Pergamon Pressから取り上げるのは約束違反だ」。幾らCaptain Maxwellでも口約束は口約束以上のものではない、と言ふのが我々の立場ですから「公式の契約文書に基づいて出版社を移すことに決めて、それを通知してゐるのであって、許可を求めてゐるのではない」と返事したので、Captain Maxwellは「高がチンピラ研究者共が」と益々激昂、「ISNがそれを実行したら、訴訟を起す、その結果、ISNは地上から姿を消す」と脅迫して来ました。言った通り、当時のISNは貧乏学会、若しそんな訴訟に負けたら法廷の費用など払へるわけもなく、学会自体が消えて無くなるのは確実でしたので、公益法人としてのISNの本拠があったUKの弁護士に相談しました。帰ってきた返事は「このケースが法廷に来てISNが負けることはあり得ない」。少し安心しましたが相手は名うてのCaptain Maxwell、我々だってISNを潰したと世界の神経化学者から恨まれたくはありませんから多少の不安は残ったといふのが正直な所でした。然し、流石のCaptain Maxwellも訴訟を起しても勝ち味は無いことは悟ってゐたと見えて、この線での仕返しはこけ脅し以上のものではありませんでした。それでもMaxwellはMaxwell、事はそれだけでは済みませんでした。

兎にも角にも、最初のJNC 1980年1月号が刷り上がった時、New York在住だった私とRaven Pressの側で働いた人たちが集まって、第1号の表紙に署名して祝杯を挙げました（図1）。それ以来、我々と当時のRaven Pressの人達とは今に至るまで楽しいお付き合ひが続いてゐます。特に私はNew Yorkの郊外に住んでゐましたので、折に触れて逢って、飲んで、食べて、お喋りする仲になりました。Alan Edelsonの周りにはRaven Pressの主力を為してゐた有能で魅力的な女性が数多く、私は何時も「Alanのハーレム」と呼んでからかったものでした。ハーレムを「家庭的」と言ったら顰蹙を買ふに違ひありませんが、Raven Pressには家庭的な雰囲気がありました。一年ほど前にAlanからRavenのスタッフの集りがあって、昔のハーレムメンバーがアメリカのあちこちからNew Yorkの北の郊外にある彼の家に馳せ参じたと写真付で報告が来ました。“後の祟り”が恐ろしいので“Alanのハーレムパーティ”の写真はご覧に入れません。

Captain Maxwellの仕返しは予期しない形で襲って来ました。翌年から出版社を変更することになったからと言って、その年の雑誌の出版を止めるわけには行きません、東西のChief Editorのオフィスは今迄通り、投稿されて来る原稿を審査し、出版に値するものを採択して、出版社に送ります。ところが、送られて来た原稿を毎月の号に収めるのは出版社の役目です。送る方は、これで何月号が一杯になるから次の原稿からは次の号、と言ふやうな見当は付かないのです。然も、一箇所ではなくて、二か所のChief Editorのオフィスが世界を二分して独立して機能してゐますので、原稿の量と月々の号のバランスが判るのは出版社だけです。それなのに1980年の1月号からはRaven Pressが出版すると通知して以来、Pergamon Pressは、勿論Maxwellの指示に依るものに違ひありませんでしたが、ISNへの一切の連絡を遮断しました。勿論、雑誌の号数と実際の出版日のずれはそのままです。こちらがしなくて

はならないのは、1980年の1月号に載る原稿からはRaven Pressに送らなくてはならないのですが、その境目が何処になるか見当が付きません。だからと言って1979年12月号を一杯にするだけの原稿をPergamon Pressに送らなかったら、契約違反の口実を与へますから、我々は正にCatch 22の状態に追ひ込まれました。どの原稿までが1979年12月号に収まるかはその号が出て来るまで我々には判らない、その号はPergamon Pressが出版するのですから、1980年の4月頃にならないと出て来ない。新しい契約によってRaven Pressは1980年1月号を遅くとも1月中には出版する義務がある、こちらに唯一出来るのは、12月号を塞ぐに充分と思はれるだけの原稿をPergamon Pressに送って、1979年12月号に収まらなかった原稿は返して貰ふより無いのです。然し、Pergamon Pressの側からは完全な国交断絶なのですから、救ひのない我々の立場はお判り頂けると思ひます。

この問題が結局だうなったか？　答は私のオフィスからPergamon Pressへ送った原稿のうち、1979年12月号迄に載らなかったものが20数編に及ぶことになりました。勿論こちらからは余分な原稿は返して呉れと催促するのですが、全く返答無し、無視されました。著者に対しては、1979年のうちに採択の通知が行き、著者は何時校正刷りが来るかと待ってゐる時、肝心の原稿はPergamon Pressの何処かへ行方不明。ことによるとゴミとして既に処分されてしまったかも知れないのです。現在に至るまで、これら20数編の原稿はあの当時を知る少数の人達の間で“the hostage manuscripts”（「人質原稿」）の名で呼ばれてゐます。私はChief Editorとして出来る唯一の事をしました。人質原稿の著者に電話で事情を説明して、新しいコピーを送って貰ふのです。現在のやうに総てが電子ファイルになってゐて、さっとプリント出来る、或は添付ファイルとして送れる世の中ではありません。場合に依っては原稿総てタイプし直しです。それでも大部分の著者は編集者も犠牲者の側である事情を理解して呉れましたので、再送して貰った原稿をRaven Pressに送ることで何とか動き出すことが出来ました。それでも、運の悪かった「人質原稿」は投稿・審査・採択のタイミングで、それより後に採択になって直接Raven Pressに送られた原稿より遅れて出版されるといふ大変申訳ない結果になりました。原稿の再送をと言ふ依頼を受けて電話して来たWisconsin大学の1人の女性著者を忘れることが出来ません。彼女は、電気泳動のゲルの写真を自分ではこれ以上は出来ないと思ふ最適のプリントを作るのに暗室に一日籠った、もう一度同じ事を繰返さなくてはならない、と電話口で泣き声でした。私としても、誠に申訳ない、と只ひたすらに謝るよりありませんでした。そんなゴタゴタがあったために、JNCのRaven Pressからの出版が軌道に乗るのには半年近く掛りました。Captain Maxwellの祟り、恐るべし。

此処で本題を外れて全く別の話題を挟みます。上に電気泳動のゲルの写真の話をしました。あの当時は、誰でもゲルを写真に撮り、ネガを現像し、印画紙にプリントして出版用の写真を作りました。著者として、何が正しい所見であるかを確かめて、それを読者に最も納得が行くやうに準備するのは当然のことです。実験の結果として得られたゲルを見た上で、フィルムの選択、露出、現像液の種類、温度、時間、印画紙の選択、必要に応じての覆ひ焼き、焼き込みは誰でも使った写真技術でした。「写真」は「真」を「写す」と書きますが、写真の写す「真」は一つではないのです。撮影からプリントまでの多数の段階での条件の変化に依って、最後に出て来る「真」は千差万別です。現在は、digital technologyで写真を撮り、PhotoShopで処理することでこれらの条件をコントロールして、目的とする結果を得ることが出来ますが本質は同じです。ところが、最近はそのやうな処理はどこまで許されるか、何処からはデータの捏造と考へられるのかが議論されてゐます。その議論を当て嵌めたら、昔は誰でもやってゐた写真の処理はデータの捏造だったのだといふ議論が成り立ち得ます。著者が何が本当の所見であるかを知ってゐて、それを最も忠実に示さうと思ったのだとしても、それは著者の解釈でしかないと

言へばそれまでです。逆に、撮った写真には一切手を加へてはいけないといふのは写真技術の限界を知らないからで、本当の所見を示すためには「撮って出し」の写真ではなくてPhotoShopの助けを借りる方が望ましいどころか、屡々必要なのだと言ふ議論も当然あり得るのです。最近は、そのやうな現実を知らず、技術の限界も知らずに、研究と言ふものの本質を見失った議論をしてゐることが多いと感ずるのは私だけでせうか？

閑話休題

Maxwellは1980年以降もPergamon PressはJournal of Neurochemistryを出版し続けると宣言してゐたのですが、最早協力して呉れるEditorial Boardは存在せず、「人質原稿」を同じJournal of Neurochemistryの名前で出版したら、それこそ逆にISNから訴へられて勝ち目のないことは明らかでしたので、彼に出来た最大限の意地悪を最後として彼とISN/JNCとの縁は切れました。一事が万事、MaxwellのISN/JNCに対するやり方は彼の所謂Maxwell Empire全体に及んでゐましたので、少しづつボロが出て、彼は法的に、社会的に追ひ詰められて行きました。そして、1991年の秋、豪華な自分のヨットに乗って地中海、カナリー島付近を航行中のある晩、彼は船から落ちて溺死しました。それまでの経緯から、彼の死が自殺であったのか、事故死であったのか、といふ詮索が盛んに行はれましたが、私の知る限り、現在に至るまで結論は出てゐないと理解してゐます。「驕るるもの久しからず」、壇の浦に沈んだ平家の末路と地中海に沈んだCaptain Maxwellの末路には重なるものがあるやうです。「平家物語」同様「Captain Maxwell物語」も「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」の感、深いものがありました。

最後にISNにとって、Journal of Neurochemistryにとって、世界の神経化学者にとって目出度し目出度しの話でこの昔話を締めくくりたいと思ひます。1980年半ばまでには「人質原稿」の問題も過去のものとなり、Raven PressによるJNCの運営も軌道に乗りました。そして、その年の終りにRaven Pressから送って来たISNの取り分だと言ふ最初の小切手を見て私は肝を潰しました。何と30万ドルを優に超してゐたのです！　既に書いたやうに、Pergamon Pressから毎年来てゐた「ISNの取り分」は3,000ドル精々だったのですから、突如として100倍以上なのです。私は即座にAlan Edelsonに「このチェックの額に誤りは無いな？」と電話しました。ところが彼は私が額が少な過ぎると文句を言って来たのだと思ったらしく、彼の返事は「出版を引き受けた最初の年だったから、色々な準備もあったし、Copy Editingの部門も強化する必要もあった、来年はもっと良くなると思ふ。理解して呉れ」。私は、口から出かかった「これまで毎年Pergamon Pressから来てゐたのは3,000ドルだった」と言ふことは止めました。そんなことを言ったら、Alanは「判っちゃあゐるけど、お前ら研究者は世間知らずの阿呆だ」と言ったでせう。これを契機に、それまでは会員からの会費で細々と運営されてゐたISNは財政上の安定を確保することが出来、隔年の総会、中間年のSpecial Conference、ISN School、若手研究者へのTravel Grant、発達途上国の神経化学者への援助、などなど、お金はかかるがISNとして意味のある事業をやる余裕が出来ました。私自身、

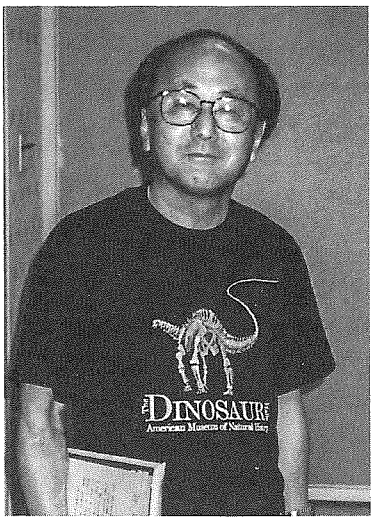

図2　ISN Kyoto 1995でISN Presidentの任期を終り、意地悪な友人から贈られたDinosaurのT-シャツ姿の筆者

1989年から4年間ISN Treasurer、1993年から1995年までISN Presidentをやりましたが、潤沢な資金に支へられて、大した苦労もしないでISNを運営することが出来たのも10年前に全く偶然のタイミングで受動的に激動の真っ只中へ放り込まれて苦労したお蔭だったと自分に言ひ聞かせました。ご承知の通り、今はJNCの出版はRaven Pressの手を離れてをりますが、これはAlan EdelsonがRaven Pressを手放して、彼自身、出版業を離れたことに依るもので、Maxwellの時とは違ひ、出版社の移行は総て紳士的・事務的に進められました。正直なところ、今のISNの役員、会員の方々は贅沢に慣れ過ぎてゐはしないか？と一抹の不安を感ずるのですが、それは私が既に年寄りの域を超えて、化石化した存在である証拠かも知れません。化石と言へばISNにはDinosaur Clubといふ私的・非公式な集りがあります。これは、過去のISN Presidentの集りなのですが、クラブの命名者は私です（図2)。申して置きますが、このクラブにはISNからの財政援助はありません。

私は最近2008年に最終的に日本に戻って米国の永住権も放棄するまで48年間日本の外に住みましたので、直接JSNのお手伝ひをする機会はあまりありませんでした。外にゐて、極力日本の先生方にISNの活動に参与して戴けるやうに努力はしたつもりではありましたが、中々思ふやうには行きませんでした。然し、近頃は、もう、日本の先生方の存在なしではISNもJNCも運営出来ない状態になってゐるのを拝見して、日本の神経化学の為にご同慶の至りだと思ってをります。

References

1) 鈴木邦彦：「Saul R. Koreyと私、1960年代初めのNew Yorkでの思ひ出」蛋白質核酸酵素 48: 1296-1305, 2003.

2) Greenslade, R.: Maxwell's Fall. Simon & Schuster, 1992.